

明治大学人文科学研究所紀要 第44冊 (1999) 169—180

日本語学習者の語彙習得に関する調査研究 ——(1)基本語彙の問題点について

佐 藤 政 光

— Abstract —

On Vocabulary Acquisition by Learners of Japanese: (1) Several Problems with Fundamental Vocabulary

SATO Masamitsu

The purpose of this paper is to reconsider the meaning of and problems with fundamental vocabulary as part of teaching the Japanese language. Regarding the acquisition of vocabulary, it is important, as a matter of course, to consider related issues of meaning, syntax, style and so on. Moreover, it is essential to consider, beforehand, how to choose appropriate vocabulary to be taught to students of Japanese.

The selection of vocabulary requires, in this case, choosing words deemed necessary for the formation of basic sentences; this selection must also include practical vocabulary, which offers a high rate of use in everyday life.

At present we have several fundamental vocabulary tables for Japanese language teaching, among which the most important is the vocabulary table in *A STUDY OF FUNDAMENTAL VOCABULARY FOR JAPANESE LANGUAGE TEACHING* (The National Language Research Institute, Research Report 78, 1984). This paper examines the problems of this vocabulary table and offers several analytical viewpoints. In conclusion, this paper remarks that selecting fundamental vocabulary is predicated on a clear articulation of the purpose or purposes it is to serve. This premise is based on the view that fundamental vocabulary must include the necessary vocabulary for basic learners and that the necessary vocabulary is variable, according to the learner's purpose.

《特別研究》

日本語学習者の語彙習得に関する調査研究

——(1)基本語彙の問題点について

佐 藤 政 光

1. はじめに

語彙の習得に関しては、意味の問題、文法上の問題、文体の問題等々、様々な問題との関わりを抜きに考えることができない。そして、さらに、ことばの教育（あるいは学習）という現実的な場を考えた場合、学習すべき適切な語彙をどう選ぶかということがもう一つ大きな問題として現れてくる。限られた学習期間で効率よく必要な語彙を身につけるには、どのような語彙をどういう順序で学ぶべきか、ということを見捨てるわけにはいかないからである。

この学ぶべき語彙の選択という問題は、つまるところ、文を組み立てるためにどうしても必要な語彙、実生活上の使用頻度の高い語彙、そうした基本的な語彙を選び出すことにほかならない。

日本語は、諸言語のなかで比較的数量多くのことばを覚えなければならない言語とされており、その根拠とされるのが「語のカバー率」を比較した次の表である。

〔表 1.〕 語のカバー率 (単位%)⁽¹⁾

語 数	英 語	フランス語	スペイン語	中国語	朝鮮語	日 本 語	
500まで				63.1	66.4	51.5	
1,000 "	80.5	83.5	81.0	73.0	73.9	60.5	
2,000 "	86.6	89.4	86.6	82.2	81.2	70.0	
3,000 "	90.0	92.8	89.5	86.8	85.0	75.3	
4,000 "	92.2	94.7	91.3	89.7	87.5	(*77.3)	*3,500まで
5,000 "	93.5	96.0	92.5	91.7	89.3	81.7	
：						：	
10,000 "						91.7	

この比較は、厳密に言うと、比較の元になる資料（テキストのジャンル、延べ語数の規模、語の単位等々）に大きな質的な相違があるであろうから、単純には鵜呑みにできないと思われるが、それでも、日本語が和語・漢語・外来語を混用することから来る類義語の多さがカバー率を下けているであろうことはある程度想像できる（このカバー率の比較については別途問題としなければならないこと

である)⁽²⁾。それにしても、上の表を見て気がつくのは、共通性の高いヨーロッパの諸言語と比べて日本語のカバー率が低いことは、表記上、語構成上の大きな違いから見て当然のこととしても、比較的類似点の多い中国語・朝鮮語と比べても、カバー率がかなり下回るという点である。この現象は、日本語における類義語の多さにその要因を求めるだけでは不十分なのではなかろうか。特に、中国語の5,000語レベルが日本語の10,000語レベルに匹敵するというのは不可解な感じが否めない。こうした比較については、やはり、語の単位の決め方をはじめとして、具体的な点についての精密な検討をしなければ納得のいく説明は得られないように思う。

しかし、ともかく、その数値を高いと見るか低いと見るかは別にして、60%、70%、80%のカバー率がある程度限定された語によって実現可能であるという印象は上の表からも十分に見て取ることができるし、後で検討するように、語の集め方、語のとらえ方によっては見かけ上よりもいい数値が期待できるようにも思う。

そうした点も含めて、本稿では、日本語教育における基本語彙の意味と問題点について考えてみたいと思う。

2. 日本語教育における基本語彙

厳密に言うと、「基本語彙」という術語はこれまでいくつかの議論があり、まだその意味が定着しているとは言い難いようであるが⁽³⁾、今、『国語学大辞典』の語彙の項の説明を引用すれば、次のようになる。

「基本語彙とは、使用率が大きく、しかも対象とする言語作品あるいは言語体系の中に幾つかの層を設けて考えることができる場合（たとえば雑誌であれば、実用記事・文芸作品・趣味など掲載する内容別の層を設け、また平安時代物語であれば作品別に層を設けることができる）、できるだけ多くの層にわたって出現する語の集合をいう。したがって、基本語彙は、小さな量の語によって、対象とする範囲に含まれる言語作品・言語体系中の語（単位語）の大部分を占めることができるという性格を持つ。」（国語学会編『国語学大辞典』（1980）樺島忠夫の解説より）

つまり、「基本語彙」は、①使用率が大きいこと、②使用範囲が広いこと、の2点で説明されている。これは一見して統計的手法により導き出されうる、科学的・普遍的な説明であると思われる。①の使用率の大きさだけでは、田中（1984）の指摘にもあるように、「語彙調査の結果を眺めてみれば、基本語となりうるような単語は、概して頻度が高いといえる。しかし、その逆は成立せず、頻度の高い語は、必ずしも基本語ではない。」「頻度というものが、調査データの内容からの影響をまぬがれないことが、頻度のみによって、ユニバーサルな意味での、基本的な語を選定していく道をはばんで」⁽⁴⁾おり、②の使用範囲を加味することによって、その欠陥が大きく是正されと考えられるからである。しかしながら、この2点のみによって基本語彙が十全に導き出されるかというと、必ずし

日本語学習者の語彙習得に関する調査研究——(1)基本語彙の問題点について

もそうはならない。統計的手法だけではどんなに調査対象を大きく広くとったとしても、言葉の基本的な骨格を形成する語が細大漏らさず網羅されるという保証は望めないであろうし、たとえある語のグループがすくい取られたとしても、それらの語の偏りの是正や重要度の順位づけについては、単に統計的手法だけでは不安をぬぐい去ることが不可能であろう。

そこで、どうしても、個人の判断や経験による主観的方法を導入せざるを得ない。このことは、単にそれによって種々の意味分野の語彙を体系的・系統的に拾い集めることができることを意味するだけでなく、個々人に判断基準をどこに置くかということを必然的に強いることから、選定される語彙の使用目的を明確にせざるを得ないことにもなるであろう。したがって、「基本語彙」は①使用率が大きいこと、②使用範囲が広いこと、のほかに、③「特定目的のための」⁵⁾、「ある目的の上にとって人為的に選定されるべき功利性をもった」⁶⁾語彙である、という性格が付け加わることになる。日本語教育における基本語彙であるならば、たとえば「日本語教育のための」という限定句が付け加わるのが自然であり、無限定の基本語彙というものは考えにくい。

事実、これまでの基本語彙と呼ばれるものはそのようにして選定されてきたし、国立国語研究所が作成した『日本語教育のための基本語彙調査』(1984)(以下、『基本語彙調査』)も同様の経緯をたどって生まれている。

『基本語彙調査』の調査の目的は「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙について妥当な標準を得る」⁷⁾ということであり、調査の結果として「基本語二千」「基本語六千」を得ている。

この『基本語彙調査』は日本語教育界において長く待望されていたもので、その完成はこれまですでに多くの方面で重要な役割を果たしてきていると言える。しかし、この『基本語彙調査』は、そのタイトルからも分かるとおり、一つの調査報告であり、決して完成された語彙表とは謳っていないことにも注意したい。

基本語彙リストは、それが不完全なものであっても、教材作成、能力レベル判定、辞書作成の基準等に大きな影響力を持つものである以上、継続的に更なる補完・改良を進めていかなければならないものであると思われる。

3. 基本語彙の問題点

『基本語彙調査』で得られた基本語彙を中心にして基本語彙についての問題点を探ってみることにする。

『基本語彙調査』は未だ完成途上のものであると述べたが、『基本語彙調査』のいくつかの問題点のなかで特に指摘すべき問題は中道(1983)⁸⁾の指摘であろう。国立国語研究所編『日本語教育指導参考書9 日本語教育基本語彙七種比較対照表』(1982)によれば、『基本語彙調査』の「基本語二千」と他の六種類の語彙リストとの間では、各語彙表間の一致度が非常に低いことが示されている。「他の六種類の語彙リスト」とは次の六種類である。

- ①岡本禹一 (1944) 『日本語基本語彙』 (国際文化振興会) 2,012語
- ②加藤彰彦 (1963, 64) 「日本語教育における基礎学習語」 (『日本語教育』第2号および第3・4合併号, 日本語教育学会) 1,393語
- ③玉村文郎 (1970, 78) *Practical Japanese-English Dictionary* (海外技術者研修協会) 3,209語
- ④樺島忠夫・吉田弥壽夫 (1971) 「留学生教育のための基本語彙表」 (『日本語・日本文化』第2号, 大阪外国語大学留学生別科) 1,803語
- ⑤文化庁国語課 (1971, 75) 『外国人のための基本語用例辞典』 3,691語
- ⑥J. V. Neustupný (1977) *A Classified List of Basic Japanese Vocabulary* (Monash University, Department of Japanese, Melbourne) 1,796語

実は、『七種比較対照表』に掲げられている一致度などの数値は『基本語彙調査』にあるものと多少の違いがある。中道 (1983) の指摘にある「国研二千語を含めた七種のいずれかに採られた延べ六〇七〇語のうち、全七種にあるものは二七八語 (四・六%) にすぎず」とあるのは『基本語彙調査』では「285語 (14.0%)」となっている。これは『七種比較対照表』では分母が6,070であるのに対し、『基本語彙調査』では2,030となったのが大きな理由である。「基本語二千 (実数2,030)」との比較・対照を中心に考えれば、このほうが分かりやすい数値であるのかもしれない。しかし、どちらの数値が語彙表間の違いの実態をより正確に表しているのかは不明である。

そもそもこの数値の違いはその後の比較対象語の異動や比較の方法の違い等によると思われる。ここでは新しいほうの『基本語彙調査』にある数値を下に引用したい。

〔表2.〕「基本語二千」との共通語 (一致度)

語 彙 表	収録語数	比較対象語	一致語	一致度
国際 (1944)	2,012	1,965	1,437	0.518
加藤 (1963, 4)	1,393	1,330	1,181	0.517
玉村 (1978)	3,209	3,147	1,758	0.484
Neustupný (1977)	1,796	1,756	1,247	0.436
文化 (1975)	3,691	3,535	1,685	0.396
吉・樺 (1971)	1,803	1,605	636	0.124

日本語学習者の語彙習得に関する調査研究——(1)基本語彙の問題点について

〔表 3.〕「基本語二千」「六千」の各語彙表間での共通度

	「基本語二千」		「基本語六千」	
	共通語数	累 積	共通語数	累 積
七種共通	285(14.0)	285(14.0)	286(4.7)	286(4.7)
六 〃	579(28.5)	864(42.6)	585(9.7)	871(14.4)
五 〃	435(21.4)	1,299(64.0)	513(8.5)	1,384(22.8)
四 〃	321(15.8)	1,620(79.8)	577(9.5)	1,961(32.4)
三 〃	248(12.2)	1,868(92.0)	799(13.2)	2,760(45.6)
二 〃	128(6.3)	1,996(98.3)	1,331(21.9)	4,091(67.5)
一 〃	34(1.7)	2,030(100.0)	1,969(32.5)	6,060(100.0)
	2,030(100%)		6,060(100%)	

七種共通語数の割合である4.6%と14.0%が表わす数値の違いの意味は今問わないとしても、どちらの数値も期待値からは遠いという印象は拭いきれない。中道（1983）はこうした結果に至った原因として、①「初級」の範囲に対する認識の違い、②語の基本性の違いについての認識が十分に認識されないままに漠然とした「汎用」基本語彙として提示されたものが多いこと、の二つを挙げている。

中道（1983）は、「日本語教育において、ある語が「基本的」であると判定されるためには、およそ次のような三つの条件のいずれかにあてはまるものでなければならない」としている。

- ①文型ステップ的基本性……基本文型を構成するために必要な語彙であること。（助詞・助動詞、形式名詞、待遇レベル関係語彙など）
- ②学習課程向基本性……教室内で基本的な文型の扱い方を学習する際に、適当な実例として文型の中に挿入して用いられるのに適した語であること。（文型の習得の邪魔にならないことが条件）
- ③実用的基本性……学習者が教室外の実際場で接する日本語の中で多く用いられ、特に話題のキーワードとなることの多いものであること。（これは学習者の学習目的・学習環境によって異なるものである）

そして、②の「学習課程向語彙」と③の「実用向語彙」の選択基準が不統一で恣意的であったことが、語彙表間の食い違いが生じた一因であるとしている。七種共通の語数がわずかに285語にすぎないということを見れば、たしかにそうとしか言えない結果であろう。しかし、ここで念押ししておくなければならないことは、このことから『基本語彙調査』の語彙リストが信頼に堪えないという結論には必ずしもならないということである。中道（1983）の指摘は、七種の語彙表の比較対照自体にそもそも問題があることを言っているのであって、『基本語彙調査』の問題点を指摘したのではない。『基本語彙調査』はすでに各方面で貴重な資料として使用されているし、その利用価値は高いものである。今後の課題は多くの検討を加えて語彙リストをより信頼度の高いものに改善していくことであろう。そのためには、『基本語彙調査』が有する具体的な問題点をできるだけ明らかにしておくことが肝要である。

『基本語彙調査』の編者は調査の問題点と今後の課題を次のようにまとめている。

(1)判定材料として『分類語彙表』を用いたことによる問題点。

- ①母体とする資料が書き言葉であることによる偏向。②『分類語彙表』がいわゆる「 β 単位」を用いているため、複合動詞が少なくなっている可能性が高い。③『分類語彙表』の各語彙領域での抽象的な語から具体的な語へという配列を反映して、意味の広い抽象的な語が多く選定された可能性がある。④「音（ね、おと、おん）」「何故（なぜ、なにゆえ）」のように、漢字で表記された語がいずれの語形で判定されたか不分明のものがある。⑤助詞・助動詞が選定の対象にならなかった。⑥「一般」と「一般に」、「行く」と「行き」など同語幹の名詞と副詞、動詞とその派生名詞などが別々の語彙領域に配されているため、それら相互の関係を商量するのに不便であった。
- (2)調査の目的が、その対象・基準において、抽象的でありすぎたきらいがあり、選定者が選定すべき語彙について具体的で明確なイメージをもちにくかった可能性がある。したがって、基本語彙全体の性格について不明瞭な印象を持たれる可能性がある。（殊に、「基本語六千」のうち、「第一次集計資料—二千語」から移された136語については問題がある）
- (3)日本語教育経験者とそれ以外のグループとの判定者間で、判定の類似性についてかなり明瞭な線を引くことができる。このような方法を採用かぎり、判定者による判定結果の偏りは免れない。
- (4)この調査の、専門家による主観的・経験的判定法の欠は、将来の、より広い、様々のジャンルでの使用語彙調査結果を参照し、これらを商量することで補われて行くべきものである。
- (5)選定された語彙について、そのカバー率を具体的に検証することが必要である。（編者は「不完全ながら、「第一次集計資料」によって一部実験した結果によれば、新聞・雑誌などのやや硬い文章においては、大雑把に「六千語」で85～90%、「二千語」で60%前後カバーできると言ってよいかもしれない」ことを付け加えている。）

4. 『基本語彙調査』についての私見と提案

まず、前節にまとめた問題点について私的な意見を付け加えたい。

(1)判定材料として『分類語彙表』を用いたことについて

- ①書き言葉への偏向はある程度あるにしても、それは他の調査結果を参照することによって改善されることと思う。それよりも、書き言葉と話し言葉が同列に混在していることのほうが問題だと思われる。話し言葉に限定される語には何らかのマーキングがあったほうがいいのではないだろうか。
- ②複合動詞は、語構成によって意味が推測できないものについては独立させるしかないが、そうでなければ、別立てせずに、下位分類として（注記的に）基本的なものを列挙しておくことでいいのではないだろうか。もちろんその場合には、たとえば、「持つ」の項に「持ち込む」「持っていく」「持ってくる」「持ち物」を挙げると同時に、「込む」の項に「-込む」、「行く」の項に「-ていく」、「来る」の項に「-てくる」をそれぞれ付け加えておくことが必要である。ちなみに、この問題点の指摘のとおり、「持ち上げる」「取り返す」などは表に載っていない（「取り戻す」は表にある）。

日本語学習者の語彙習得に関する調査研究——(1)基本語彙の問題点について

- ③抽象的な語が多くなるのは、使用率の高い語を重視する以上、ある程度仕方のないことであるように思う。
- ④語形の不分明なものは、最も一般的なものを見出し語とし、その他の語形を注記することが必要であろう。
- ⑤助詞・助動詞等、いわゆる基本文型を構成するために必要な語も選定の対象とすべきではないか。『分類語彙表』を用いたことの最も大きな欠陥はこの点だろうと思う。語彙の分類枠組みをそのまま踏襲することの意味がどれだけあったのか、疑問を感じる。
- ⑥動詞とその派生名詞などは同一の見出しにまとめる工夫が必要なのではないか。このことは②の指摘とともに基本語彙の数を減らすこと役立ち、それによって語のカバー率を上げることにものなると思うのであるが。
- (2)この指摘は、実効性のある基本語彙というものが一体何語位までであるか、についての反省を迫るものであると思う。最初に述べたように、基本語彙というものが何らかの目的を持って選定される以上、あるレベルからは学習する側の目的を明確にしておかなければ選定の際に語彙のイメージがつかみにくくなるのではないだろうか。この指摘は、また同時に、基本語彙の一つの限界が二千語レベルの辺りにあることも予想させるように思う。
- (3)このことによる偏りはたしかに免れない点である。判定者間の偏りを少なくして（平準化して）語彙の性格を曖昧にするよりは、語彙選定の目的を明確にして、それに沿う判定者の選出を考えるのが、むしろ、適切なやり方ではないだろうか。
- (4)その通りであるが、新たな語彙の枠組み、分類方法の検討も同時に行っていくことも大事ではないだろうか。
- (5)語彙のカバー率の検証は非常に大事である。特に、小説、エッセイ等一般的な読み物のほかに、少し専門的なもの（政治、経済、自然科学の入門書のようなもの）についても、検証が必要であると思う。また、これは語彙表の改訂版についても同様である。

以上が『基本語彙調査』が指摘している問題点についての筆者の考えであるが、この他にもいくつか指摘したい点がある。

a. 複合名詞・複合動詞の扱いの工夫について

複合語の中で意味上分離できて誤解のない（少ない）語は分離・別立てにし、複合語は注記（下位分類）で示すにとどめ、見出し語としてカウントしなくてもいいのではないか。

（例）「持っていく」→「持つ」「-ていく」, 「冬休み」→「冬」「休み」, 「録音テープ」→「録音」「テープ」

b. 感動声の「アハハ」「ハハハ」、間投の「あ」「ああ」「あっ」「おお」「ははあ」は特に取り上げる必要はないように思うが、どうだろうか。

c. 書き言葉と話し言葉の整理

「だから」と「ですから」などは単にスタイルの問題であり、見出しを別に立てる必要はないよう

に思う。注記で十分ではないだろうか。

d. 時代の変化に即応した語彙選択の必要性

日本語教育のための基本語彙では、実社会での使用率が重視されるため、その時代特有の語が入り込むのを防ぐことはむずかしいであろう。そうであれば、時代の変化とともに生まれたり消えたりする語について敏感になっている必要もあるはずである。たとえば、「ソ連」を削って「ロシア」を加える、「タイプライター」を削って「ワープロ」「パソコン」を加える、「昭和」を削って「平成」を加える、などである。

e. 接辞的漢語の扱い

「歴史」と「歴史的」、「労働」と「労働者」、「論理」と「論理的」、「ドイツ」と「ドイツ人」「ドイツ語」などは別見出しとなっているが、基本的な接辞的漢語を見出しとして独立させれば、このような語は一つにまとめたほうが分かりやすくないだろうか。

また、こうした整理を行うことは語のカバー率を良くするのに役立つであろう。

5. 必要語彙としての基本語彙

前節まで、すでに存在する『基本語彙調査』をより完成されたものへと改善していくためにはどのような点に配慮すべきかについて、私見を述べてきたが、最後に、基本語彙そのものについて、もう一步踏み込んだ考察をしておきたいと思う。

国研の『基本語彙調査』の目的は「日本語学習者が……はじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙」を選定することであった。一方、基本語彙は結局のところ何らかの「目的」に沿った形でしか存在し得ないものであるとも言える。もし、そうであるならば、「一般的」な基本語彙という考え方はそれ自体矛盾をはらんだものになってくるとも考えられる。現実の社会では、浅野（1981）が指摘しているように、「学習者の置かれた状況、目的によって必要語彙が違ってくる」⁹⁾。そして、その場合の「状況」と「目的」は実に具体的なものであって、必ずしも「一般的」「汎用的」なものではあり得ない。こうした事情が問題の焦点を曖昧にしている根本原因だと思われる。

「日本語教育のための基本語彙」が「日本語学習者が……はじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙」であるとする、その必要度から見て、先に挙げた中道（1983）の三つの条件のどれかを充たす必要があるであろう。この三つの条件を充たす範囲に限定するならば、「日本語教育のための基本語彙」は日本語教育という世界において極めて一般的であり、汎用性の高いものであり得ると思われる。しかし、そうした語彙はかなり限られた数の範囲に限定されるのではないだろうか。『基本語彙調査』の中の「基本語二千」と「基本語六千」との間にはそうした矛盾をはらんだための溝があるように思われる。

また、『基本語彙調査』の編者が解説の最後に「不完全ながら、「第一次集計資料」によって一部実験した結果によれば、新聞・雑誌などのやや硬い文章においては、大雑把に「六千語」で85～90%、「二千語」で60%前後カバーできると言ってよいかもしれない」と付け加えたのは、やはりこの語彙

日本語学習者の語彙習得に関する調査研究——(1)基本語彙の問題点について

リストが「新聞・雑誌などのやや硬い文章を理解するための」ものであったことをうかがわせる。思うに、『基本語彙調査』はその利用目的をもっと具体的に説明すべきであったと思われる。語彙の内容・数量から推し量ると、この語彙リストは日本の高等教育で留学を考える成人の学習者向けに最も相応しく、海外で学ぶ学習者や児童、ビジネスマンにとってはそれほど向いていないと言えるかもしれない。

結論を言えば、日本語教育における基本語彙は、「どういう状況で何のために必要か」を中心に据えたとらえ直しも行われるべきであって、今後、それぞれの学習者の目的に合った基本語彙表が多数出現することが望まれる。

〔注〕

- (1) 参考文献(1)および参考文献(2)より。なお、参考文献(2)の表は、玉村文郎『日本語の語彙・意味(1)——NAFL H 本語教師養成通信講座第6回配本』アルク、1987年からのものであることが注記されている。
- (2) なお、基本語彙について、日本語・英語・フランス語・スペイン語の有効性を比較したものに、真田治子(1992)がある。それによれば、国際連合の「児童の権利に関する宣言」を「解説する場合、日本語の基本語彙は外国語のものと比較して、より多くの異なり語数を必要とする。これについては、同じ意味分野を表す語に和語・漢語・外来語が併存するという、日本語の語彙構造の特殊性が、一因となっていると考えられる。」としている。
- (3) 参考文献(9)参照。
- (4) 田中章夫「基本語彙と基本語」(参考文献(4)に所収)参照。
- (5) 林四郎(1971)の次の定義による。
 - (1)基礎語彙 意味の論理的分析によって求められる半人工的な語彙
 - (2)基本語彙 特定目的のための「○○基本語彙」
 - (3)基準語彙 標準的社会人としての生活に必要な語彙
 - (4)基調語彙 特定作品の基調を作るのに働く語彙
 - (5)基幹語彙 ある語集団の基幹部として存在する語彙
- (6) 真田信治(1977)の次の定義による。

基本語彙…ある目的の上になって人為的に選定されるべき功利性をもった語集団。

基幹語彙…ある特定語集団を対象としての語彙調査から直接に得られる、その語集団の骨格的部分集団。

基礎語彙…特定言語の中に、その中核的部分として構造的に存在する語の部分集団。
- (7) 国立国語研究所『日本語教育のための基本語彙調査』(参考文献(4))解説より。
- (8) 参考文献(9)参照。
- (9) 浅野百合子(1981)は、必要語彙の違いの例として次のような状況・目的の違いを挙げている。
 - 1) 自国において日本語を学習するか、あるいは日本に滞在して学習するか。
 - 2) 一般社会人であるか、学生であるか。
 - 3) 専門の学問のための学習であるか、生活のためであるか。
 - 4) 読み書きを主要目的とするか、会話を主要目的とするか。

〔参考文献〕

- (1) 垣内松三(1938)『基本語彙學 上』文學社
- (2) 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』秀英出版

- (3) 国立国語研究所 (1982)『日本語教育指導参考書 9 日本語教育基本語彙七種比較対照表』国立国語研究所
- (4) 国立国語研究所 (1984)『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
- (5) 国立国語研究所 (1986)『日独仏西基本語彙対照』秀英出版
- (6) 森岡健二 (1951)「義務教育終了者に対する語彙調査の試み」『国立国語研究所年報 2』
- (7) 阪本一郎 (1958)『教育基本語彙』牧書店
- (8) 林 四郎 (1971)「語彙調査と基本語彙」『国立国語研究所報告39 電子計算機による国語研究Ⅲ』秀英出版
- (9) 林 四郎 (1982)「基本語彙―その構造観」『講座日本語の語彙 1 語彙原論』明治書院
- (10) 樺島忠夫 (1972)「基本語彙」『日本語と日本語教育―語彙編一』文化庁
- (11) 真田真治 (1977)「基本語彙・基礎語彙」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』岩波書店
- (12) 国語学会編 (1980)『国語学大辞典』東京堂出版
- (13) 浅野百合子 (1981)『教師用日本語教育ハンドブック⑤語彙』凡人社
- (14) 木村睦子 (1982)「語彙の計量」『講座日本語の語彙 1 語彙原論』明治書院
- (15) 中道真木男 (1983)「日本語教育の基本語彙とその辞書」『日本語学』2-6
- (16) 水谷静夫 (1983)『朝倉日本語新講座 2 語彙』朝倉書店
- (17) 『日本語学 (特集 基本語彙)』1984年, 3-2
- (18) 玉村文郎 (1984)『語彙の研究と教育 (上)』国立国語研究所
- (19) 窪田富雄 (1989)「基本語・基礎語」『講座日本語と日本語教育 6』明治書院
- (20) 加藤彰彦 (1990)「教育基本語」『講座日本語と日本語教育 7』明治書院
- (21) 真田治子 (1992)「諸言語の基本語彙の有効性の比較」『計量国語学』18-7
- (22) 真田治子 (1994)「日本語と西欧語の基本語彙の対照研究」『計量国語学』19-4
- (23) 山下喜代 (1993)「日本語教科書の語彙」『日本語学』12-2
- (24) 田島 堂 (1993)「語彙分類の考え方」『日本語学』12-5
- (25) 水谷信子 (1997)『日本語教育概論』放送大学教育振興会

(さとう・まさみつ 商学部教授)